

# 帰国子女の英語力

## 事例分析 成功例

### Case Study on English Ability of a Returnee Student

付岡 京子 \*

Kyoko Tsukeoka

#### I. 日常会話と学力としての英語力の違い

外国で暮らせば、誰でも自然にその国の言葉が覚えられ、我々は考えがちである。学生からも、英語の学習が思う様にはかどらないと、「やはり外国に行かないと駄目なのではないか。」との、質問を受けたりする事がある。外国で暮らせば、確かにその国の言葉を浴びる様に聞く機会に恵まれるだけでなく、その文化的な背景、雰囲気にもふれる事ができる。モデルとなる言葉を浴びる様に聞けるという事は、常にその場で自己修正の機会を与えられるという事であり、その積み重ねは、語学学習の上で、非常に有効な手段となる。このような恵まれた言語環境の下では、たとえ受身ではあっても、少なくとも日常会話に関する限り、その雰囲気の中では、余り不自由を感じないで暮らす事が可能であろう。だがその事と、英語力が身についたという事とは、必ずしも同義ではないと思われる。

現に、かつてある学校の英文講読のクラスに、成績のかんばしくないアメリカ帰りの学生がいた。一度も外国に出た事のない他の学生の中にあって、むしろ読解力の不足が目立っていたので、アメリカで不自由しなかったのかきいたところ、全然不自由しなかったとの答えが返ってきた。日常会話は、多分にその場の雰囲気、人

間関係に左右される。相手によって言葉がすらすら出てきたり、思う様にしゃべれなかったりする事もある。所謂「沈黙の言語<sup>1)</sup>」の占める割合も大きい。我々が純粋に発せられた言葉の意味内容によってのみ理解しているわけではない事は、最近ではよく知られている事実である。

幼児が現地では何不自由なく話していたにもかかわらず、一時帰国で日本に帰ったとたん、全然しゃべらなくなったという話を、欧州より帰国した人から聞いた事がある。筆者の長男も、帰国の飛行機の中迄は、弟と英語でしゃべっていたのに、日本の飛行場に到着して祖父母の顔をみたとたん、「僕は日本人だから、もう英語はしゃべらない。」と宣言し、その後英語は一切口にしなくなってしまった。

「習うより慣れろ」といわれている様に、言葉の学習には慣れの要素が強い。ヨーロッパの様に地続きで、お互い行き来が激しいところでは、日常生活の中で外国語を使う機会も多く、慣れるという事が生活の中で容易に行われる。ところが日本の様に、地理的に他の国々から隔離されたところに位置していると、生活の中で日常的に外国語に慣れるという事は難しい。それ故に言葉に関しては、かなり習熟して帰国しても、特別な手当をせず、そのまま放っておくと、習得したレベルを維持できなくなり、い

つの間にか忘れてしまうという事が多い。意識のどこかには残っていたとしても、自然のままに放っておくと、少なくとも実用レベルで役立つ語学力は残存し得ない。公立でも目黒の東山小学校の様に、ずっと以前から帰国子女の語学力維持の為の特別なクラスを開設していたところもある<sup>2)</sup>が、通学区域にその様な特別なクラスがない場合、地域の普通小学校に編入され、習得した外国語を使う機会もないままに、次第に忘れていってしまうといった例が多いと思われる。かつて英語圏に暮らしていたという事が、必ずしも英語力があるという事に結びつかない場合がかなりある事を、認識する必要がある。

## II. 英語力定着の為の条件

英語教育では伝統のある某大学で、帰国子女をその対象の中心にした、学力があると認められた場合に、受講せずに単位がもらえる受講免除認定試験 exemption test を実施している。単位認定基準が比較的高い事もあって、合格率はそれ程よくない。特に英作文に関しては、合格率が低い。科目担当者の推薦もあるが、希望者は誰でも受験できるので、自分では学力があると思って受験しているわけであるが、現実には余り英語力が身につけていなかったという事であろう。

語学力が定着するかどうかは、単に滞在年数のみならず、外国で暮らした時期、年齢が大きく係わってくるものと思われる。特に学校で読み書きを習う段階、アメリカでいえばキンダーガーデン以上の所謂公教育にくみこまれている時期を過ごしたかどうか、別れ道になるのではないかと推測される。それ以前のナースリースクールだけだと、現地ではネイティブと同様に話していたとしても、帰国後余程特別な手段をこうじない限り、日本でその英語力を維持する事は難しい。又逆に年齢が進んでいると、現地で慣れる迄に時間がかかるので、英語習熟度は必ずしも単純に滞在期間に比例するものではない。

特に日本人の場合、日本人同士がかたまって群を作る習性があるとよく指摘されるが、この様な場合は、外国に身はおいていても、現実には日本人社会を場所をかえてそのまま外国にもちこんでいる事になり、極端な場合には、日本語で事がたりてしまう場合さえ出てくる。この様な場合は、せっかく外国で暮しながら、外国語学習に有効な言語環境が整っていない事になる。特に近年日本が経済力をつけ、経済大国になると、日本の企業に学びたいという風潮が出て来て、日本語学習熱にも一層の拍車がかかる様になる。外国に行っても、日本語が通じる事が多くなってくると、外国での英語学習の為の言語環境は、かつての様に何とか英語で通じさせなければどうしようもなかった時とは大分違ってくる。それ故外国にいても、受身な態度で安易に暮らしていると、余り効果は望めない。

現に学生の海外研修にしても、本学に限った事ではないが、いくら外国に身をおいていても、日本人同士のグループで同じクラスに出て、団体行動に終始していたので、語学学習の面で、海外研修は余り効果がなかったと、研修に参加した本学英语専攻のかなりの学生がアンケート調査の中で答えている。昭和女子大で必修のボストン研修も、新聞に紹介された時には、その利点や長所のみ強調されていたが、実際に携わっている教員の話では、問題点も多く、学習効果はそれ程あがっていないとの事である。

安全性を重視すれば団体行動にならざるを得ないわけで、団体行動が多くなれば、現地の人と個人的に交わる機会はある程度減ってしまうという自己矛盾をはらんでいる。外国人の先生から授業をうけるという点だけであれば、日本にいても可能であるし、日本と変わらぬメンバーで授業をうけるのであれば、事クラスに関する限り、雰囲気も変らない。しかも日本人同士日本語で私語でもしていれば、発想も変らないという事になる。英語的な発想で物事を考える事が、英語を上達させる上で欠かせないが、団体でなく個人で飛び込まない限り、発想を変えざるを得ないのではないだろうか。団体は本来、他人

に対する気配り、調整を必要とするはずだが、同族意識の結びつきで安易に形成される事の多い団体では、逆に甘えの意識が生じ、個々人の責任において行動するという事が少なく、その事によって、ちょっとでも異なったものに対して排他的になり易い。一方、同じ事をしていれば、その集団の中では安住していられる。一般的に人間の習性として、つい楽な方に流され易いので、楽な環境に取り囲まれていれば、わざわざ苦を求めて、厳しい環境に自らを追いこむ事をしなくても、不思議はない。外国に行っても、集団としてではなく、個人の責任で、各々が個々人として対応しない限り、海外研修を通しての語学学習の効果は、余り期待できないのではないだろうか。

日本の大学の場合、授業中でも相互扶助の精神が旺盛で、一人がさされると、皆で助けあって答えさせてしまう。教師の方でも、それを許してしまっているのではないだろうか。授業内容に関する事を話しているのであれば、私語の形で相談しあってもかまわないと考えている向きもある様に思われるが、筆者等はいかねがね、さされた場合は質問をした教師に対して、個人の責任において答えるべきであって、教えてもらって答えるのは、ルール違反だと思っている。ディスカッションの場合も、個人の責任において発言すべきであって、私語をしあって誰の意見かわからない様な意見を口にするのは、これ又ルール違反ではないだろうか。自分の発言に対して自らが責任を持つという基本が、日本の大学においてはなおざりにされている様に思える。その為に授業に緊張感がなく、なれあいの内にすすめられているという結果を生んでいるのではないだろうか。その結果、授業中も休憩時間も区別がつかないという筆者の学生時代には考えられなかった様な事態も生んでいる様に思えてならない。責任の所在があいまいだと、一方では、時に全体責任といった形で、極端な場合には逆に全然かわりあいを持たなかった人に迄、責任がかかってくるといったおかしい事態を生んでしまうのではないだろうか。

海外に出るという事は、これ迄自分が生まれ育った日本という国を、外から客観的にみる機会に恵まれるだけでなく、個人の責任において行動する為の絶好の機会でもあるので、それを可能にする様な設定がなされるべきであろう。どんな形であれ、唯海外に出さえすれば、英語力がつくと考えるのは、当たらないといわざるを得ない。厳しい事ではあっても、集団のなれあいではなく、個人の責任において行動する機会に直面すれば、異文化とともに相対する事になり、そこでこれ迄自分が生まれ育った自国の文化的背景、風俗習慣との比較を通して、学ぶ事は多いと思われる。

単なる挨拶程度の会話であれば、ブローケンでも慣用句の機械的な丸暗記でもすむであろうが、自分の考えをきっちり相手に伝えたいと思えば、論理的な展開にも慣れねばならないし、微妙な言葉のニュアンスにも気をつけねばならない。微妙な言葉のニュアンスの差に敏感になれば、語感も育ち、英語力も着実に身についてくる。外国に行っても受身な態度で唯漠然と過していると、現地にいる間はまわりの雰囲気助けられ、特に不便を感じないでいられる為、英語力がついたかの様に錯覚し易いが、実際は英語力として定着していない事が多い。外国語を定着させる為には、意識的にかつ積極的に取りくむ事が必要ではないかと考える。

### Ⅲ. 成功例の分析

ここで具体的に成功例と思われる事例を検討してみたいと思う。幼少時をシンガポールですごし、今春公立大学の医学部を卒業して、現在大学病院勤務の女医MOさんの例である。帰国子女は会話はできるが、受験英語には弱いとよくいわれていたし、実際にその様な例が多かった。しかしMOさんの場合は、駿台の模擬試験で科目別の英語では、常にトップを競っていた。帰国後彼女がまだ小学生の頃、日本では大学の教養英語のテキストに使われている様な本も楽しんで読んでいるという話を耳にした事もあり、

どの様にして英語力を定着させ、維持してきたのか、かねがね知りたいと思っていたので、この度質問事項<sup>3)</sup>をたてて問い合わせたところ、MOさんの母親から、ちょうど何らかの形で記録に残しておきたいと思っていたとの事で、思いがけずMOさんの英語学習歴を、母親の手で原稿にして、送ってきてくれた。その手記<sup>4)</sup>を、その後応じてくれたインタビューの内容とあわせて、分析してみたい。

O家は四人家族、父親が駐在員として1970年12月末、家族一緒にシンガポールに赴任した時、Mさんは程なく4才9ヶ月になろうという所、2才半違いの弟のS君は2才3ヶ月だったという。それから約3年、正確には2年8ヶ月シンガポールに滞在して帰国、帰国時にMさんは7才5ヶ月、S君は5才寸前になっていた。O家の母親は英文科出身であったが、出発前特に子供達に英語を教えるという事はしなかったという。従ってMさんは現地に行って初めて英語に接した事になる。

シンガポールは、中国系、マレー系、インド系の順に人口比が高く、現地で話されている英語は中国訛が強いので、すぐにシンガポール英語とわかるという。Mさんが帰国後近所のアメリカ人から、その発音を perfect British English といわれたという話をきいたので、どこでイギリス英語を身につけたのかきいたところ、わずか一年通っただけの英国系私立小学校で習得したとの事であった。

O家はクリスチャンで、シンガポールでも小学校入学前は、子供達を地域の教会の付属幼稚園に入れていた。シンガポールでは英語が公用語ではあるものの、一般に中国語訛が強い英語が主流で、Mさんが通った幼稚園の先生も、中国系のシンガポール人だったとの事だが、親切で教養のある先生であった為、他に日本人の園児はいなかったものの、Mさんは第一日目から一人で喜んで通園したとの事だった。園では地元の友達と一緒に、英国のナースリーライムや、中国語の子供の詩を習ったという。そして習い覚えたナースリーライムを暗唱して、絵本をみ

せながら、弟のS君に聴かせたりしていたという。

住居も意識的に日本人のいないマンションを選んだ由、雛祭り等折あるごとに、英国人、オーストラリア人、カナダ人、ニュージーランド人、フランス人、アメリカ人等多国籍の地域の人々を招いてパーティを開いたり、逆にイースターのエッグハンティングに招かれたりしあったという。個人レベルの文化交流ともいべきこの様な日常を通して、Mさんは英語の予備知識はなかったものの、毎日の生活の中で、ごく自然に英語に親しんでいった様だ。

しかし家で Peter Rabbit, Winnie-the-Pooh 等の英語のレコード等は聴かせてはいたものの、家の中での日常会話では英語は使わず、日本語で通じた由、又幼稚園も二年目に入った時点で、小学校入学に備え、仮名とやさしい漢字を家で教えはじめたという事だった。この事からも推察できる様に、小学校選定にあたっては、大部分の日本人駐在員の子弟が通う日本人学校にするかどうかについては、当初両親の間では多少議論があったという事を、インタビューの折母親がもらしていたが、最終的には「英語は忘れても、経験は残る。」との考えで、英国系の私立小学校 Dover Court Preparatory School に入れる事を決意したという。又小学校入学を契機に、学習面でのMさんの負担を考えて、家での漢字の学習を中止、学習面では英語の学習に専念させたという。

学校では一クラスの人数は24~25人、インターナショナルスクールだったので、国籍は様々で、先生が生徒一人一人の進度にあわせて個別に教えるという形式をとっていたとの事だが、芸術その他広い分野の子供の為の本、Ladybirdを国語の教科書に使っていて、毎日スプリングのテストがあり、Ladybird 12c, *The Open Door to Reading*<sup>5)</sup>を読みおえると、学年末に賞 Class Prize が出たという。

Ladybird のテキストは、The Ladybird Key Words Reading Scheme 'a', 'b', 'c' 各シリーズごとに12段階のテキストで構成され、

計36冊から成っている。Key Words は次の様に定義されている。

Some of the words in the English language are used much more frequently than others. These words which appear more frequently can be called Key Words.

Research shows that twelve of Key Words make up one quarter of all those we read and write. One hundred of them from half, and three hundred about three-quarters, of the total number of words found in juvenile reading. Reading skill is accelerated if these important words are learned early and in a pleasant way.<sup>6)</sup>

簡単にいえば、頻出度の高い単語を Key Words と呼び、それ等を段階を追って体系的に学べる様にしたのが、このシリーズである。

…These 36 graded books are all written on a controlled vocabulary, and take the learner from the earliest stages of reading to reading fluency.

The ‘a’ series gradually introduces and repeats new words. The parallel ‘b’ series gives the needed further repetition of these words at each stage, but in different context and with different illustrations.

The ‘c’ series is also parallel to the ‘a’ series, and supplies the necessary link with writing and phonic training.<sup>7)</sup>

‘a’ シリーズで新しい単語を導入し、それがくり返し出てくる。‘b’ シリーズでは ‘a’ で既出の語いが、別の文脈の中でくり返し出てくる。更に ‘c’ シリーズでは、書き方及び発音との関連づけも考慮されている。

The Ladybird Key Words Reading Scheme is based on these commonly used words. Those used most often in the English language are introduced first — with other words of popular appeal to children.

All the Key Words list covered in the early books, and the later titles use further word lists to develop full reading fluency. The total number of different words which will be learned in the complete reading scheme is nearly two thousand. The gradual introduction of these words, frequent repetition and complete ‘carry-over’ from book to book, will ensure rapid learning.

The full-colour illustrations have been designed to create a desirable attitude towards learning — by making every child eager to read each title. Thus this attractive reading scheme embraces not only the latest findings in word frequency, but also the natural interests and activities of happy children.<sup>8)</sup>

かくしてこのシリーズ最後の12cを読み終わると、約2000語の頻出度の高い語いが、その運用も含めて、無理なく習得できる様に編まれており、12cの表題に象徴される様に、又次に引用する前書きにも明記されている様に、かなりの本を楽しんで読める様になっている。

This is the last book in the Ladybird Key Words Reading Scheme. Now that you have reached it you will find that you can read most — perhaps all — of the books in your School library. You may have discovered this already, and also that there are a great many books in your town library and local bookshops that you can read with enjoyment and interest.

The more you read, the greater your skill becomes, and the more you learn. The whole world of reading lies ahead. You are now free to enter the treasure house of books, where the knowledge of man awaits you.<sup>9)</sup>

Mさんは1年で12c迄読みおえ、学年末には

一才年上のスウェーデン人の少年と共に Class Prize を受賞したというから、読書力のある真面目で優秀な生徒だった事が伺える。1973年の帰国迄わずか一年の在学だったが、この学校での速読に通じる徹底した読み書きの訓練が、Mさんの、その後の英語力の下地になっている事は容易に推測できる。弟のS君も、同じ様な環境で三才から幼稚園に入園して、現地では「ネイティブの人より達者に英語で喧嘩をしている。」と云われた事もありながら、姉のMさん程の英語力が定着しなかったのは、滞在期間が読み書きを覚える段階に達していなかった為と母親も考えているし、その推測は妥当だと思われる。

更にMさんの帰国時の学年が、小学二年二期という日本語の学習の遅れを余り意識せずにする年齢であった事、その上転入した地域の公立小学校の担任になった女教師の好意的な対応に恵まれた事も、Mさんの英語力定着の一因と考えられる。同じ社宅に住むニューヨーク帰りの男児の場合、受持ちの教師から「なまじ英語ができるのがいけない。はやく忘れなさい。」と云われたというから、「折角覚えた英語を忘れてはいけませんよ。」とってくれるだけでなく、放課後遅れている漢字迄教えてもらえたMさんは、如何に良い先生に恵まれていたかがわかる。

又帰国後最初に住んだ所が、港区六本木という外国人居住者の多い土地であった事も幸いしている。クリスチャンのO家に通っていた教会、ユニオンチャーチで、定期的に英語の説教を聴く機会に恵まれた事、後に三鷹に移転してからも、近くのウェスト東京ユニオンチャーチで、毎週英語の説教を聴く機会に恵まれたという。又ピアノの先生が、日本人と結婚しているアメリカ婦人だった事もあって、意識的に英語力の維持を目的にするのではなく、日本にいながら生活の中で、自然に英語を使う機会に比較的恵まれていた事も、特筆に価する。

帰国後両親が意識的に心がけた事は、テレビをおかず、シンガポールより持ち帰った本を読んだり、レコードを聴く習慣を守り続けるとい

う事だったという。帰国直後から、Lang の Fairy Book のシリーズ等、年令相応の英語の本を常に買い与え、読書の喜びを忘れさせない様にした事が、後の高校受験、ひいては大学受験の時にも、英語の学習に余り時間をさかずに良い成績をあげられた事につながったと思われる。小学生の内に Blue から Yellow 迄の Fairy Book のシリーズ全12冊<sup>10)</sup>を読破したMさんの13才の誕生日に、父親は署名入りの英詩集 *A Little Treasury of Favorite Poems*<sup>11)</sup>を贈っている。シンガポールの小学校で徹底的に読み書きの基礎的訓練を受け、その後も読書の習慣を絶やさなかったMさんの読む速度は非常に速く、父親が海外出張の度に買って帰る英語の本を、Mさんはまたたく間に読んでしまうという。更に三鷹に移ってからは、上智大学在籍のアメリカ人学生に、文章を書く事を習わせたという。英文は日本文と構成が異なるので、早くからきちんとした英文を書く訓練を受け、パラグラフの概念に親しんだという事は、後にICU高校でMさんのエッセイが、しばしば模範エッセイと賞められた下地作りとなっていたものと思われる。

O家は親戚に音楽家が多く、外来音楽家との家族ぐるみの交際もあり、英語の習得にとって恵まれた環境にある事は否定できない。しかし日本に住んでいる以上、日常的に英語が話されるのを耳にしているわけではない。しかもMさんの専門は医学であって、語学ではない。同じ家庭環境にありながらも、弟のS君と根本的に異なる点は、丁度読み書きの習得期に、Mさんは学校で徹底的な訓練を受け、楽しんで読書する習慣を守り続けたという事であろう。ペンフィールドのいう脳生理学的にみた9才までの言語習得適齢期<sup>12)</sup>に、中国訛の強い英語とはいえ、生活の中で日常的に英語という外国語に触れる機会をもち、その後一年間とはいえ、英国系の小学校で努力して、しっかり読み書きを覚えて、基本的に十分な語い力を身につけたMさんだが、もしこの一年で目安の Ladybird 12cを終了せずに帰国していたとしたら、違った結果になっ

ていた可能性もある様に思われる。中学、高校と学校でアメリカ英語に親しんだ為、現在では発音は帰国時の完璧なイギリス英語ではなく、アメリカ英語になっているという事だが、総合的な英語力は揺るがない様だ。

## 注

- 1) Edward Twitchell Hall, *The Silent Language*, 南雲堂, 1966.  
Julius Fast, *Body Language*, 金星堂, 1973.
- 2) 荻山昇, 「続・海を渡る子供たち, 海外子女教育相談」, 海外子女教育財団, 1979.
- 3) 質問事項 別添
- 4) F.O.「手記」別添
- 5) W.Murray, *The Open Door to Reading*, Wills & Hepworth Ltd., 1967.
- 6) Ibid., a back cover.
- 7) Ibid., p.52.
- 8) Ibid., p.1.
- 9) Ibid., p.2.
- 10) Andrew Lang ed., *The Blue Fairy Book*  
—————, *The Brown Fairy Book*  
—————, *The Crimson Fairy Book*  
—————, *The Green Fairy Book*  
—————, *The Grey Fairy Book*  
—————, *The Lilac Fairy Book*  
—————, *The Olive Fairy Book*  
—————, *The Orange Fairy Book*  
—————, *The Pink Fairy Book*  
—————, *The Red Fairy Book*  
—————, *The Violet Fairy Book*  
—————, *The Yellow Fairy Book*  
Dover Publications, Inc., New York, 1965.
- 11) *A Little Treasury of Favorite Poems*, Avenel Books, Crown Publishers, Inc., New York, 1978.
- 12) Wilder Penfield & Lamar Roberts, *Speech and Brain-Mechanisms*, Princeton University Press, New Jersey, 1959.

## 質問事項

1. 何才の時に外国に行って、何才の時に帰国したのか。
2. 行く前に何等かの準備をしたか。(子供に対する現地の言葉の導入等)
3. 現地ではどのような教育機関に籍を置いたのか。
4. 学校ではどのような勉強をしたのか。
5. どのような地域に住み、家族を含め地域の人とどのような交流をしていたのか。
6. 家での過ごし方及び日常使っていた言語は何語であったのか。
7. 入学試験等帰国後の日本での教育の事が気にならなかったか。
8. 帰国後、日本での生活に違和感や不便を感じる事はなかったか。
9. 帰国後、語学力維持の為に何等かの処置や対策をこうじたか。

## F. O. さんの手記

娘がシンガポールに着いたのは、1970年のクリスマスイヴ、4才9ヶ月になる2日前の事でした。美しい声で「オーホーリイナイト」をピアノに合わせて歌っている声の主が、その夜教会のイヴのサーヴィスで歌ったお隣の韓国の奥様でした。弟は2才3ヶ月でした。帰国したのは約3年後の八月末でした。帰国後すぐ娘は、港区立南山小学校二年级二学期から転入学を許され、弟は同学校の幼稚園に入りました。5才になる一週間前の事でした。小学校二年二学期といえば、まだ漢字の数もそれ程多くなく、幸いなことに担任の先生がやさしい女の方で、放課後に遅れている漢字を教えて下さった上に、「折角覚えた英語を忘れてはいけませんよ。」と云って下さった由でした。私共の社宅のお隣りの男の子は、小学三、四年生の時、ニューヨークから帰国したのですが、受持の先生から「なまじ英語ができるのがいけない。早く忘れなさい。」と云われたとの事でした。伺いましたところ、ニューヨークでは家庭内で英語を話しておられたということでした。ですから日本に帰っ

て、本人も先生もとまどわれたのではないでしょう  
 うか。

娘がシンガポールに行って初めて入ったのは、  
 ローカルのバーカーロード・メソヂスト教会  
 の附属幼稚園でした。公用語が英語のシンガポ  
 ールですが、中国訛の強い英語でした。しかし中  
 国系のシンガポリアンの先生は、教養も高く親  
 切で、只一人の日本人である娘の面倒をよくみ  
 て下さり、第一日目から娘一人預けましたが、  
 何の問題もなかった様でした。英語を何も教え  
 ていませんでしたが、幼稚園の送迎バスから元  
 気に降りて来る娘の胸には、いつも先生からの  
 メッセージが安全ピンで止めてあり、私共を安  
 心させました。朝バスが迎えに来ると、元気に  
 楽しげに乗り込んで行くのでした。日本でいえ  
 ば幼稚園の年少組でしたから、全く気楽に先生  
 や地元のお友達に愛されて、幸せな一年を過ご  
 しました。毎日画用紙四倍もの大きさの紙に水  
 彩画を描かせて頂いたり、英国のナースリー  
 ライムや中国語の子供の詩を習ったりして、楽し  
 げでした。

幼稚園二年目には、翌年の小学校入学に備え  
 て、仮名とやさしい漢字を少し家で教え始めま  
 したが、日本人学校でなく、同じマンションに  
 住むイギリス人の少女の通っているドーヴァー  
 コート・プレパトリースクールに入学してか  
 らは、二重生活は子供には重荷に違いないと漢  
 字を教えるのを止めて、英語を伸ばせるだけ伸  
 ばして頂くことにしました。この学校は英国人  
 の経営する私立学校で、先生方も勝れた英国人  
 でしたが、生徒の国籍は様々でした。国語の教  
 科書には英国のレディバードが使われ、一クラ  
 スは24~25人でしたが、先生が一人一人教えら  
 れるので、それぞれ進度が異なっていました。  
 毎日スペリングテストがありました。学年の終  
 りに、スウェーデンの約一才年上の少年オーレと  
 娘が賞を頂きました。

日本人学校に入れずに、ローカルの幼稚園や  
 小学校に入れた事については、他の日本人の方  
 の中には、「英語はどうせ忘れるのに」などと  
 云って下さる方もありました。夫と私は、「た

とえ英語は忘れても経験は残る。」と考えまし  
 た。住んだ所は、英国人、オーストラリア人、  
 カナダ人、ニュージーランド人、フランス人、  
 アメリカ人などの外国人が殆どのマンションで  
 した。折角外国に住んでいるのだからと、あえ  
 て日本の方との新しいお交わりは致しませんで  
 した。日本人学校に学んでいる子供達の殆どは、  
 学校から帰っても、近くに住む日本人と行き来  
 をし、日本にいるのと変わらない生活をしてい  
 る様でした。

家ではピーターラビット、ウィニーザプー、  
 ディズニー映画のストーリーレコードなどを買っ  
 て来て子供達に与え、彼らも楽しんでいる様子  
 でした。娘はナースリーライムの絵本一冊を暗  
 記して、弟に絵を見せながら読んでやっていた  
 した。家庭内での会話は日本語を心がけ、交ぜ  
 て話すことのないよう注意しました。日本の雛  
 祭りの日には、持ってきたお雛様の掛軸をかけ  
 て、ローカルのお友達を招いたり、又しばしば  
 国籍の異なる知人を招いてパーティを開きまし  
 た。イースターにはお庭でのエッグハンティン  
 グに招かれたり、チャイニーズニューイヤーに  
 はホームドクターの家に招かれたりして、シン  
 ガポールの習慣を学ばせて頂くチャンスを与え  
 られました。

帰国後に英語を忘れない為にした事の第一は、  
 家にテレビを置かなかった事です。娘には英米  
 の年相応の英語の本を常買い与え、娘も喜ん  
 で読んでいました。シンガポールから持ち帰っ  
 た英語のレコードもよくかけてやりました。そ  
 れはあちらから持ち帰った習慣でもあった訳で  
 す。

中学に進学するにあたっては、英語を少しで  
 も上達させる事の出来るクリスチャンスクール  
 を選びました。娘は真面目にABCから丁寧に  
 学びました。先生も御親切に宣教師の先生とお  
 昼にもう一人のアメリカ帰りの生徒とお茶を頂  
 きながら会話する機会を作って下さいました。  
 高校もある学校でしたが、家の近くに国際キリ  
 スト教大学附属高校が出来ていましたので、思  
 い切って受験する決心を致しました。(もし落



ちたら元の学園には戻れませんので。) 幸い入学できて、(英語は満点だった由でした) 帰国して7年近くなりますのに、帰国子女扱いを受けました。エッセイライティングの授業では、しばしば模範エッセイと評されたのは、真に嬉しい事でした。帰国子女が三分の二を占めるこの学園の雰囲気は、シンガポールの英国の学校を懐かしんでいた娘には、大変気になって、幸せな高校生活を送りました。

大学受験にあたっては、英語の勉強に時間をあまりさかないで済んだのは、有難い事だったに違いありません。今春横浜市立大学医学部を卒業して、そのまゝ附属病院で研修医として働き始めました。外国から教授が来られると、お迎えに行く様云われたり、しばしば医学の文献の翻訳をお頼まれすると申しています。

幸い帰国したのが、まだ小学二年生でしたから、何の問題もなく、大変幸せな例と考えております。弟の方は、三才から幼稚園に入れたとはいえ、英語の読み書きを覚えるに至っていませんでしたので、姉の様にはまいりませんでした。ヒアリングは多少出来ますので、簡単な英語会話はできます。私にはできない〔l〕と〔r〕の発音の区別も出来る様です。シンガポールでは、「お宅の坊やは、家の子供より達者に英語で喧嘩をする。」と近所の英国人に云われて、苦笑したものです。息子の場合は、娘の様にはいきませんでした。それでもテレビの英語の映画をオリジナル音声で聴いているのは、嬉しい事です。

帰国後の事は、心配致しませんでした。呑気にいられたのは、子供達が小さかったからです。この五月に初めて娘は一人でヨーロッパへ旅しました。ロンドンが一番楽しかった様でした。子供の頃からの英雄ロード・ネルソンの像にも会う事が出来たのでした。

1992年9月2日